



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	サンスクリット叙事詩『マハーバーラタ』第13巻の文学研究〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	中村, 史
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第11621号
Issue Date	2015-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/58777
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Fumi_Nakamura_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名：中 村 史

	主査 教 授 細 田 典 明
審査委員	副査 准教授 林 寺 正 俊
	副査 准教授 鈴 木 幸 人

学位論文題名

サンスクリット叙事詩『マハーバーラタ』第13巻の文学研究

『マハーバーラタ』第13巻は、第12巻における「王の法」「窮迫時の法」「解脱の法」に続いて「布施の法」（第1-166章）「ビーシュマの昇天」（第167-168章）が説かれる。両巻は様々な法（務め・生き方：dharma）を説く点で共通し、『マハーバーラタ』の原型が成立してから後代になって追加されたと言われる。また、第12巻は「解脱の法」が大部分を占め、そこにインド哲学の一学派であるサーンキヤ思想の原初的形態が見られるため、従来、思想・哲学的研究がなされてきた。これに対し、第13巻は全体としてはほぼ顧みられることなく、むしろ『マハーバーラタ』から「省く」べきという見解さえ存在した。しかし、第13巻「布施の法」は多くの説話に富み、『マハーバーラタ』から本章を削除するならば150を超える多くの説話が失われることになる。本論文では、はじめに「布施の法」に見られる各説話の内容を検討し、各論として五つの説話について、文学作品としての評価を試みる。

底本は、写本の読みを取捨選択して校訂した「プーナ批判版」ではなく、ニーラカンタ注を付す「キンジャワデカル版」を採用する。和訳に付す原文には、「プーナ批判版」と南インド批判版とも言える「クンバコーナム版」との校合を行う。

『マハーバーラタ』は英語による全訳(1883-1896)をはじめとして、諸各国語による部文訳・抄訳・英訳からの重訳が知られる。「プーナ批判版(1933-1966)」を底本とする翻訳もなされてきたが、いずれも第13巻に及ぶことなく中断されている。本論文に示される和訳は5点にとどまるが、諸版を参照してサンスクリット原典から翻訳という点で初訳としての意義がある。さらに、第1章に示された内容分析と構成と概要の表は、13巻全体にわたる理解を示すものとして、研究者には不可欠の研究資料になっている。

また、「プーナ批判版」校訂の問題箇所を具体的に指摘していることは重要である。特に、聴聞の功德について「キンジャワデカル版」では、第13巻のみならず『マハーバーラタ』最終巻にも繰り返して説かれる。これは、『マハーバーラタ』第1巻冒頭の内容を受けているのであり、「プーナ批判版」がこれを省略することは、『マハーバーラタ』全体の一貫性を損なうことになる。この指摘はインドの神話・説話研究者に共有されるべき貴重な成果である。

本論文は、このように『マハーバーラタ』が本来「口承文芸」であり「語り物」であって〈枠

物語〉の構造を持つ作品であるという観点から、特に〈杵物語〉について「原伝承」「語りの場と語り手」「記録と編纂」の過程に分類する。さらに、「文学性」「教説性あるいは主題性」「祝賀性」や「普遍性」「独自性」という観点からも考察を加える。申請者は既に、中世日本文学の研究で学位を取得しており、本論文においてもその学識が反映している。これらの分類は、今後、世界の説話研究や日本古典文学との関連を考察するといった学際的研究が進む中で、インド学の杵を超えた共通の問題意識を築く一助となる可能性が見られる。

本論文で示された種々な分類は和訳研究を進めて行く中で構築されたものであるが、それぞれの概念に不明確さがあり、再検討する必要がある。しかし、第13巻全体に及ぶ考察は十分に説得的であり、第2章から第6章に示された和訳と校訂、先行研究の参照は学術的意義を有するものとして評価される。

本委員会は、以上の審査結果に基づき、全員一致して、本申請論文が博士(文学)の学位を授与するにふさわしいものであると判定した。